

11月12日に市内の小学校にWAM助成事業に関する説明と連携を促す訪問に行ってきました。

教頭先生に会って、WAM助成事業での不登校児童と家族に対する訪問支援に関して説明をして、学校での不登校児童や家族の相談に対してSSWやSCが対応することになっている中で、家族の相談に対してもスポット的な対応で必要時に訪問して状況把握・調整し、適切な支援につなぐのが役割であるため、保護者にとって日々の生活の中で子供との関係などを相談する対象として適切に相談に寄り添ってくれる専門職であるのか、ということが求められているのだと思えます。

身近に相談できる専門職を求める中で、寄り添った、定期的に継続的な支援を提供してくれる、今回のWAM助成事業での訪問看護師の訪問型の伴走支援が最適であることを説明したら教頭先生がとても納得して頂き、是非連携して家族に対応して頂けることを求められたので、学校として訪問支援のチラシなどを保護者に紹介して頂くことで、法人に保護者から問合せがあり訪問依頼書の設問に答えてもらう中に、保護者が家庭を訪問することに同意して頂く項目があり同意して頂ければ、訪問看護師が直接家庭に訪問するということが可能になるということを説明しました。

今回の小学校の教頭先生は、積極的な姿勢の持ち主で、学校としても欠席者があると担任と教頭の二人体制で家庭訪問したりSSWやSCが求められる時も同伴して訪問をする仕組みを作られていたり、校内支援教室を開設されたり積極的に不登校解消に取り組まれていることを意見交換の時に話して頂きました。

当法人のWAM助成事業にも積極的に連携を勧めて頂く姿勢で、児童や家族が安心して日常生活が可能になるために優先順位として、訪問看護師による訪問支援が最善と思って頂いたことには、とても感心した次第です。

通常、学校サイドとしては他の民間との連携に対して消極的な学校が多いことは、学校にまつわる社会的課題の解決に民間と連携して解決の道を探るという姿勢があまり感じられないこともあります、今回の市教委から各学校に周知して頂いても、こちらから積極的に訪問しない限り問い合わせがない現実を知らされたことでも感じていることです。

今回の教頭先生の積極的な民間との連携に対する姿勢を持ち合わされている背

景には、外国での日本人学校での経験があり、その経験を生かされているのではないかと思えたので、日本人学校の教員に求められている資質を調べたら、専門知識だけでなく、変化の激しい現代社会に対応できる多様な能力が求められていきました。

組織的・協働的な課題解決能力が求められていて、教員一人でなく、学校内外の多様な人材と連携し、「チーム学校」として課題解決に取り組む力が重要であると記載されています。

1. 学校は地域社会の一部であるという認識

外部との協働が不可欠であることから、「学校だけで完結させない」「専門性は社会の力を借りる」という前向きな連携姿勢が身につきます。

2. 教師自身が外部の力を借りることをためらわない

職員が少ない環境の中で支援を行うため、「困った時は助けを求めて良い」という文化が根づいています。外部支援との協働を自然に受け入れられる理由です。

3. 学校・家庭・地域が一体となって子どもを支えるという姿勢

海外では家庭の負担も大きく、保護者と密に連携しながら子どもを支えます。学校・家庭・地域が三位一体で支えるという考え方方が根幹にあります。

海外の日本人学校での経験は、国内学校よりもはるかに「地域連携」や「多様性への理解」を重視する環境です。そのために、民間や外部専門職との協働を自然に受け入れられる教師が育つそうです。

今回の教頭先生の協力的な姿勢は、まさにこの「学校は社会資源とつながってこそ良い教育ができる」という実地経験から生まれたものだと言えます。